

森有正の言語論と心理臨床：対話関係における二項関係の日本的性格

鑑 幹 八 郎

1. 本稿の目的

森有正研究の一環として、本論では彼の言語論、なかんずく日本語の「二項関係」的特質として取り出された日本的な対人関係の問題について考察を加えることを目的とする。

森有正はフランスで日本語や日本思想を教えた経験から、日本語の性質について独特の観察をしている。これはさまざまな形で表現されている。彼の最後の著書となった『経験と思想』(1979)にも日本語についての省察3篇(「出発点 日本人とその経験」(a, b, c))が示されている。森有正の日本語についての考察は、心理臨床家のようにことばを主なコミュニケーションの道具として使うものにとって、極めて優れた洞察を与えるものであると考えられる。

2. 方法と資料

森有正ははっきり言語論として展開しているわけではないが、「ことばについて」という形で随想風にさまざまに語っている。ここではこれら森有正の「ことばについて」のいくつかの文章および最後の未完の論文集『経験と思想』(全集第12巻)を資料として用いる。

3. 資料の分析と検討

(1) 対人関係に規定された日本語

次に示すのは、「山本安英の会」主催の「ことばの研究会」で話し、後に森が手を入れて発表したものである(森、1974)。

「日本語を見ておりますと、日本語で何か言うわけです。「私は生徒です」とか「これは本です」とか言ってるわけですが、よく考えて見ますと、「です」というのはいったい何だろうか。「です」というのは話しことばですから「私」しかそれを言わない。あなたがそれを言う時にそれを私から見る場合に「です」と言うのはぜんぜん意味をなさないわけでしょう。「これは時計です」というのは、私が時計ですということと言うわけです。と同時に「です」の中に「あなた」が入っている。もし、目の前に非常に偉い、白いひげの生えたおじいさんが来たら、「これは時計でございます」と無意識に言ってしまう。それから前に弟とか息子が出てくると、「これは時計だ」と言うわけでしょう。すると「です」とか「でございます」とか「だ」とかいうことになっている。……これは一人称的な性格を持っていると同時に、二人称の如何がそれに影響しているわけです。ですから、「だ」とか「です」とか「ございます」とかいう、いわゆる敬語というものは……実は私、日本語全体がこういう意味で敬語だと思うのです。」(アンダーラインは森自身の強調)(森、1974p.9-10)

「だから何か日本語でひとこと言った場

合に、必ずその中には自分と相手とが同時に意識されている。と同時に自分も相手によって同じように意識されている。だから「私」と言った場合に、あくまで特定の「私」が話しかけている相手にとっての相手の「あなた」になっている。……私も実はあなたのあなたになって、ふたりとも「あなた」になってしまうわけです。これを私は日本語の二人称的性格と言います。ですから、私は日本語には根本的には一人称も三人称もないと思うんです。」(森、1974、p.10)

これらの文章の後に、彼自身の興味深い電話の経験をおかしく説明している。

「私は非常に悪い癖がありまして、電話をしながらお辞儀をするんです。電話の受話者が「あなた」についてになっている。先生から電話がかかると、まるで先生の前に出たように電話に向かってお辞儀をするという非常におかしな習慣がありまして、娘にパパは電話にお辞儀をしていると注意されたものですから、だいぶ考えましたが、やはり電話に対してもそういうことが出ている。」(森、1974、p.12)

森有正はここで二項関係における現実の社会関係における上下関係が会話に混入(森有正は「現実侵入」といっている)していることに注目していることを示している。

上のエピソードの例は森のおかしな癖というのではなく、日本では多くの人々の経験ではないだろうか。無意識的な文化的な行動であると思われる。私自身も同じようにやっていることを意識することがある。対面した対人関係の場だけでなく、電話をする相手によっても、その現実の二人称関係が維持され、表現されていることを示しているということが出来るのである。

上のエピソードはパリでの話だろうか。

同居している娘の観察ということで考えると、パリのようである。「先生」というのは、日本人であろうか。それともフランス人であろうか。パリという場所において、日本人か、フランス人かはわからないが、二項関係的な会話を彼自身が行っていることを示している。洋の東西の舞台を問わず、日本語の会話が成立しているところでは、二項関係的なものが本質的について回るものであることを証明していると言えないだろうか。

これらの文章は、日本社会の対人関係としての上下関係を含みこんでいる日本語の性質をうまく説明しているといえる。ことばについての森の省察は「経験」をめぐる複雑で難しい哲学論議になっている。論議の中心はフランス語と異なる日本語の基本構造として、二項関係が存在するということである。

(2) 日本語に関する哲学的考察：二項関係

最終的には、「経験の哲学」というところまで展望していたと思われる森有正の本格的な論文は、彼の死によって出発点で中断してしまったようにみえる。しかし、その一端は『経験と思想』にみる事ができる。この著書では、3篇のみが哲学的な考察として示されている。彼がかなり本格的に思考を展開しようと意気込んで書いていることは理解できるが、文章はそれほどまとまったものになっていないように思われる。ここでは、「出発点：日本人とその経験 (b)」, 「出発点：日本人とその経験 (c)」の中で「ことば」について書かれているところを検討してみたい。

森は次のように二項関係ということから説明している。

「さて私は、「日本人」において「経験」は複数を、更に端的には二人の人間

(あるいはその関係)を定義する、と言った。……二人の人間を定義するということは、我々の経験と呼ぶものが、自分一個の経験にまで分析されえない、ということである。……肉体的に見る限り、一人一人の人間は離れている。常識的にはそこに一人の主体、すなわち自己というものを考えようとする誘惑を感じずるが、事態はそう簡単ではない。……本質的な点だけに限っていうと、「日本人」においては、「汝」に対立するのは「我」ではないということ、対立するものもまた相手にとっての「汝」なのだ、ということである。……親子の場合をとってみると、親を「汝」として取ると、子が「我」であるのは自明のことに思われる。しかし、それはそうではない。子は自分の中に存在の根拠をもつ「我」ではなく、当面「汝」である親の「汝」として自分を経験しているのである。……肯定的であるか、否定的であるかに関係なく、凡ては「我と汝」ではなく、「汝と汝」との関係に推移するのである。……」(アンダーラインは森自身の強調)(森、全集12、p.64-65)

これにはもう少し説明が必要であろう。森は二項関係の特徴には2つあるという。ひとつは「関係の親密性」、もうひとつが「相互簷入性」あるいは「現実簷入」である。森はこの点を次のように説明している。

「関係の親密性とは、2人の間では、お互いに「わたくし」を消去してしまい、同時に外部に向かって私的存在の性格をもつ。」(日本でいう「うち」と「そと」ということで理解できると思われるが、森有正の説明はわかりにくい。)「次の、相互簷入性とは、関係が対等者間の水平な関係ではなく、上下的な垂直的な関係だという点である。……親子、上役と下のもの、先生と生徒、師匠と弟子、など一定の社会秩

序を内容とするものである。……したがって、二項関係の直接性は、本当の直接性、すなわち独立の個人の間の接触ではなく、すでにある限定を受けた者同士が、その限定の枠の中で、その限定そのものを内容として起こる直接性なのである。……」(森、全集12、p.74-75)

つまり、「二項関係の中に社会的階層が現れている。たとえば、「これは本(である。)」という場合、この助動詞は両者の関係を示すと共に、話の内容を肯定し、断定し、確言するという意味合いを含んでいる。しかし、この意味合いは、話し手が独立に賦与するものではなく、あくまで話し相手を意識の中に置き、それとの共在の上で下す意味合いなのである。であるから、「AはBだ」ということが、「AはBである」、「AはBでございます」、「AはBでございますか」などという色々の形をとることになる。

……こういう風に助動詞は、単独で、あるいは複合して、話し手の陳述の内容に対する主観の関係を述べるが、それは同時に自分が相手にとっての相手であること、つまり二人称にとっての二人称であるという建て前から使用されるのである。会話、一般に言語活動は「私」と「汝」、第一人称と第二人称との間に成立するのが基本であると考えられるが、この「私」と「汝」は相互置換が常に成立しているものなので、「私」は「汝」にとっては「汝」であり、その時、第1の「汝」は「私」になっている。……それは本質的には「汝」と「汝」との関係なのである。「私」が発言する時、その「私」は「汝」にとっての「汝」であるという建て前から発言しているのである。日本人は相手のことを気にしながら発言するという時、それは単に心理的なものである以上に、人間関係そのものの、言語構成そのものがそういう構造をもっているのである。」(12、p.86-87)

（3）二項関係とアモルファス自我構造

ここで述べているように、日本語における対人関係の特徴を明確に、しかも具体的に指摘したのは森が初めてではないだろうか。この点については現在も一般に理解さ

れているようには思われない。しかし、心理臨床の観点からすると、きわめて重要な発見ではなかろうか。ここで森の説くところを私に理解できるように図示して見たい。それは以下のようなになるだろう。

図1．森有正の二人称関係（汝と汝関係）

A．現実の関係（我と汝関係） （敬語などの使用はない）

私 → あなた
←

（関係は対になる）

B．現実の関係（汝と汝関係） （敬語などの言語使用に示される）

	あなたの私	→	あなたの私	
	←			
現実関係				
	先生		生徒	
	上役		下の人	
	親		子	
	師匠など		弟子など	

（関係は循環になる）

私は森の二項関係にヒントを得て、比較心理療法研究という観点から「アモルファス自我構造」というアイデアに至った。特に、「中核自我」core ego と「皮膚自我」skin ego の用語を説明概念として用いた。「中核自我」とは、自我境界がはっきりしていて、自己の志向が明確であることを指している。森の表現によると、ことばを語る場において西欧的な主体が一人称として存在し、別の主体（二人称）に働きかける場としての構造を示しているものである（図1のAに示されるもの）。また、「皮膚自我」は、ことばを語る場において、周囲の人々の意向を考慮しながら行動する状態を指している。森の表現による二項関係的な関係の中で語られる言語の場である。ここでは「あなたの私」として相互に語る「ことばの場」を形成しているのである。従って、「あなたの私」がどのようなものか少なくとも社会的な上下関係を敏感に感じ取る器官を必要とする。これが皮膚自我である。自己の意向を中心に社会的行動が決められるのではなく、相手や周囲の意向

や位置を敏感に測りながら反応するのである（図1のBに示されるもの）。そのため日本では、対人関係のあり方を感じ取る器官を発達させる必要がある。この必要性から発達させられるのが皮膚自我である。現実の対人関係に反応しない、内関心的によって対人関係を維持する西欧的な人格構造に対して、現実の社会的な役割をもった対人関係に敏感に反応する日本的な人格構造を記述しようとしたものである。このような人格構造を「アモルファス自我構造」と考えた。この「アモルファス自我構造」に関しては、既にいくつかの論文を発表（鑑、1999, 1998など）しているので、ここでは述べない。

（4）二項関係と「世間」

さらに、日本語の二項関係と対人関係のあり方は、「世間」という面から光を当てると、その性格がより鮮明になるように思われる。「世間」の問題には、安部謹也（『日本人の歴史意識』『学問と世間』）が精力的に取り組んでいる。また、安部の問

題提起をきっかけにして、佐藤直樹らが立ち上げた「世間学会」(1996年)で注目を浴びている主題である。この問題については、井上忠司(1977)がすでに独創的な研究『世間体の構造』を発表している。私も「日本人の恥」(『恥と意地』1998)の検討をおこなったときに、井上の「世間体の構造」を参照した。世間体の問題は日本文化や日本人の二項関係の性質を本質的に明らかにしようという側面が見られる。

佐藤直樹(1996)によると、「世間」というのは、次の3つの特徴を有しているとされている。それらは「互酬の関係」「長幼の序」「共通の時間意識」である。人間関係はお互いにかかわりあうと何らかの負い目を得る。負い目は何らかの形でお返しをすることになる。これが互酬関係である。形式として残っているものに「中元」や「歳暮」といったことがある。これは日ごろの負い目をお返しすることが示されている。まったく形式的になってしまっているが、風習としては支配的な力を今日も持ち続けていることは私たちの日ごろの体験である。この風習は共通の時間意識を有している場の中で行われる。このような人間関係は密度の濃い状態になっている。このように濃い関係から薄い知り合いの関係まで、世間での人間関係の濃淡はさまざまである。これは森のいう「親密性」と見ることできよう。そしてまた佐藤のいう「共通の時間意識」に当たるだろう。

その場で人が出会って関係ができるのではなく、すでに密度の濃い人間関係が成立している中で人間関係は展開する。それは概して社会的な上下関係を示す。前に引用した森の電話のエピソードは、この上下関係を示すものである。その密度の濃い関係は「うち」関係であり、その関係に入っていない場合は「そと」の関係、つまり「水臭い関係」、「つれない関係」、「他人関係」ということになる。「うち」にいる人と場の「そと」にいる人とは、対人関係的に大き

な心理的距離が存在している。親戚と他人というような、「うち」と「そと」の関係が成立している。この「うち」関係が「世間」である。この「世間」関係はあらゆる集団において存在している。「世間」関係は伸縮性、柔軟性、易変性をもっていて、いろいろの集団を重層的に包含している。

「世間」の指導原理は「うわさ」「空気」「意向」「好意」「安全感」などの情緒的欲求である。それは理性的、論理的には説明困難であり、安全感を求めてその場の空気や噂を醸成し、変化させていく。事後になって、その変化を説明しようと思っても、「その場の空気がそうさせた」としかいえないような事態である。このようなものが世間関係である。これは私たちの日ごろの共通した体験過程である。山本七平(1997)は、この「空気」についてさまざま例をあげ、日本的な特徴を具体的に指摘している。また、同質の研究と考えられるが、半藤一利氏の『日本海軍の興亡』(1999)や『昭和史』(2004)には、「空気」の持つ、破壊的な力をよく、証明している。

私たちはいくつもの「世間」集団に重層的に所属している。家族、親戚、友人関係、仕事関係、会社、地域など。私たちは皮膚自我を通して、その複雑な人間関係を敏感に感知しながら、社会生活を営んでいる。森のいう二項関係の特徴はそのようなものではないだろうか。この二項関係が主体的に「経験」し、「経験」を主体的に深めることを妨害すると森は考えるのである。森は、日本において個人の中に主体的に経験を蓄積していくことは絶望的であるとさえ言っている。

このように見ると、「二項関係」「皮膚自我」「世間」という鍵概念は、日本人の心性を理解する重要な視点となり、日本におけるさまざまな人間関係や社会的な出来事を理解し、対処するのに適しているといえることができる。

(5) 森有正の人間関係での苦しみ：高田
さんに会って後の苦しみ

以上の考察の例として、世間関係の中で苦しむ森有正のディレンマをみてみたい。

フランスで出会った彫刻家の高田博厚氏に会って会食をする。高田は戦前からパリで活躍した彫刻家で、ロダンなど一級の芸術家や思想家と親しい交流をもっていた人である。森はパリで高田と出会い、深い影響を受ける。それは森が展開する経験の基盤となる個人性ないし、一人称の存在としての個人というテーマであった。森はまた、高田と共同でリルケの『フィレンツェだより』を翻訳したりしている。森にとってもっとも影響力のあった人ということができるだろう。また、森のことばの考察に関する出発点が高田という存在であったということができるともかもしれない。この点は、高田の手記および森有正の対談集にもよく示されている（高田博厚、森有正1986対談集）。

会食の後で、自分が高田との関係において二項関係的になってしまっていたことに気づく。この自分の姿に、森は日記の中で深い嫌悪の情と苦しみを述べているところがある。

一人称としての私が三人称関係として相手と話すとき、互いに経験を深めることができる。これがフランスで彼が学んで経験している最も本質的な人間関係であると考えてるのである。自己の経験を深め、自己の思想を持つということはこの人間関係と経験のあり方しかありえないというのが、森の到達した発見であった。従って、自分の思想を深め、経験を深めるためには、この一人称・三人称関係をもたねばならないというのが、彼の主張であり、彼はそれを実行しようとしていた。

しかし、日本人同士となると、意見を交わしても先輩・後輩関係から抜け出ることが出来ないことを実感するのである。おそ

らく高田と森がその場で、フランス語で話したらおそらく森は二項関係的であることを嘆かないですんだだろう。しかし、日本人同士がフランス語で会話をするということが出来ないし、出来たとしても不自然であり、人工的な関係にすぎないということが出来る。日本語で話しをするとき、意図しているか意図していないかにかかわらず、無意識的に二項関係的に行動してしまうという森の嘆きは不思議ではない。しかし、問題は日本語を話しながら、なおかつ一人称・三人称関係という形式で対話をしていこうとする森の意図自体に無理があるということにはならないだろうか。次の日記の文章は彼の苦しみをよく示している。

「夫人同伴でパリ滞在中の高田氏を訪れる。ソルボンヌ広場で一緒に昼食。

僕はある種の態度に我慢ができない。自分が三人称になれないこと、そして話し相手が三人称になることを認められないこと。換言するなら、話し相手と相互に二人称の関係に入り、融合してしまい、自分自身及び話し相手が主観性を取り戻すことを認められないこと、このような態度が僕は我慢できない。

次の二つの態度を分つ本質的な相違について。一人称で話すことと、一人称で話すことは話すのだが一人称を二人称の中に流し込んで話すこと。」（全集14、p.162）

森の一人称・二人称関係的行動と無自覚的な二項関係的行動とに引き裂かれがみられる。それを意識せざるを得ないだけに大変な苦しみであると思われる。しかし、日本語を話す限りにおいて、二項関係として話す以外に方法があるのだろうか。森はフランス語であれば可能であっても、日本語を話す限りにおいては不可能な実現願望を持っていると考えられる。森自身が指摘するように、日本語は二項関係そのものを基本的な構造として表現可能なように形成さ

れてきたことばであるということが出来る。二項関係を表現するのにもっともふさわしく作られてきたし、歴史的に洗練されてきたものである。それはフランス語が一人称・三人称関係としての個人を表現するのにもっともふさわしいように形成され、歴史的に洗練されてきたものと変わりはないだろう。

安部（2004）はこの点について、1215年に開かれたカトリック教会のラテノ公会議において「告解義務」が定められ、告白教理問答がつくりあげられていったことが、個人主義の基礎をつくったことを指摘している。これによって今日の西欧の個人主義や、フランス語ないしフランス人の個人主義的な生き方が出来てきたと指摘している。また、司馬遼太郎（1998）は文化交流も盛んな狭い欧州で、違った言語が国のアイデンティティを示すものであろうし、その中でフランスはアカデミー・フランセーズ（1635年創設）によって、フランス語を洗練してきたことを述べている。

その関連で日本の「世間主義」を見ると、古事記（8世紀初期に成立）にすでに「世間」に関係する記述が記されているのであるから、1200年の歴史を有していることがわかる。歴史的には日本の世間言語の形成の方が今日のフランス語より古いのであるから、世間言語の洗練においても、フランス語より洗練され、文化として言語の特質がよりしっかりと形成されていることがわかるだろう。森有正の思想の中に、祖父の森有礼や志賀直哉のような、日本語の英語化、フランス語化が存在しているのであろうか。

フランス語で二項関係が表現されないように、日本語で一人称・三人称関係が表現されないことは自然のことであり、それを理由にして森のように日本語は絶望的であるというラベルを貼ることは難しいであろう。

（6）日本語の本質と日本語を話すこと

日本語の本質が二項関係にあり、日本文化が大きな変質をしない限り簡単には変化することはないだろうことは予想がつく。しかし、なぜフランス語の一人称・三人称関係を重要と考える森有正が日本語に執着し、日本人であることに執着するのであろうか。フランスにおいてフランス語を話し、日本人として生きぬくということは不可能なことにならないだろうか。しかも、彼の思想を伝えるのは、日本語であり、それは二項関係から離れることは出来ないということになるのは当然のこのように思われる。そして森はまさにそれを日本人として実行しているのである。このディレンマというか不可能への挑戦を明らかにするのは、森が対人関係の場で発言しているところでの「語り（文体ということと同じ意味での語り）」を検討することによって明らかにすることができると考えられる。

（7）対話者としての森有正

森有正はかなり多くの対談を文章として残している。森は対談の相手として人気のあったことがわかる。その資料の代表としては、森の死後、親友の木下順二氏が編集した『森 有正対談集 1、2』の二巻がある。これはフランスへ渡った1950年以前のものも含まれており、森有正研究にとって貴重な資料ということが出来る。その他に『言葉、事物、経験』『光と闇』などがある。これらは『森有正対談集』に再収録されている。

森有正の文章はフランス以前と以後には、これまで森有正研究（2000a）に示したように、明瞭に大きな違いが見られるが、対談に関する限り、あまり大きな違いをみることはできない。森有正は対談の中で、自在な姿勢を示して魅力的な対話者であることを証明している。エッセイのレベルでは言語の二項関係を深刻な批判を述べる森であるが、対談のスタイル（文体）は典型的

な二項関係の例であるといつてよい。しかし、森にとってはこの二項関係に対して、まったく無自覚になされている対話であるということができよう。聞く相手やプリントされた文章として読む読者には、文化やフランスの思想界に関して博学で豊かな知識を有している素晴らしい評論家とみえる。そこには「経験」や「二項関係」に悩む森の姿はみることができない。この点をどう考えたらよいだろうか。

(7) 心理療法との関連性

サリヴァン(1953)が言うように、私たちの心は対人関係の中に現われるものであるから、対人関係の場を調べることは、その個人の心の本質を調べることになると言つてよい。その典型例が対談という形式ではないだろうか。

主体的な個人の世界、つまり「私の世界」や「中核自我」の葛藤や歪みを修正したり、整理したりすることを目的として心理療法が生まれ、今日まで、整備され、技法的に洗練されてきた。西欧の一人称・三人称関係としての技法を、二項関係の対人関係の特徴とする日本において、技法としてそのまま成立すると考えるのは、森有正の苦しみを見無視することになりはしないだろうか。日本においては、二項関係を前提として、関係性を問題としてとりあげる。個別性と二項関係性が対話の2つの形態として存在し、それが対人関係を規定しているとき、日本の場で日本人同士として対話するものが、フランス語を話すような状態をかたちづくっていくことは不可能ではないだろうか。反対に、フランスにおいて日本語で面接をするような状態を想定することはできないであろう。森を通して見る限り、それは不可能のようにみえる。このように相容れず対立する対話に示される対人関係の本質的問題をどのようにとらえたらよいだろうか。今後、持続して問わねばならないのは、この点にあると思われる。

<参考文献>

- 安部謹也(2004)：日本人の歴史意識―「世間」という視覚から― 岩波新書
 安部謹也(2001)：学問と世間 岩波新書
 安部謹也(2003)：日本社会で生きるということ 朝日文庫
 井上忠司(1977)：「世間体」の構造―社会心理史への試み NHKブックス
 伊藤勝彦(1967)：対話・思想の発生：三島由紀夫、森有正、吉本隆明 番町書房
 佐藤直樹(2001)：「世間」の現象学 青弓社
 佐藤直樹(2004)：世間の目 光文社
 司馬遼太郎(1998)：日本人を語る 新潮文庫
 鑑幹八郎(1998)：恥と意地 講談社新書
 鑑幹八郎(2000)：アモルファス自我構造からみた臨床実践 京都文教大学紀要2、95-109
 鑑幹八郎(2002a)：「森有正の成育史と業績に関する検討」 臨床心理研究 (京都文教大学心理臨床センター紀要) 4、1-16
 鑑幹八郎(2002b)：「森有正の『経験の哲学』の契機とアイデンティティ形成について」(鑑他編『アイデンティティ研究の展望』IV、第1章1-26)
 鑑幹八郎(2003)：「自己分析の可能性―森有正の経験へのこだわり―」 臨床心理研究 (京都文教大学心理臨床センター紀要) 5、1-13
 半藤一利(1999)：日本海軍の興亡 PHP文庫
 半藤一利(2004)：昭和史 平凡社
 森 有正(1968)：言葉 事物 経験 晶文社 (森有正対話篇1. に収録されている。)
 森 有正(1974)：「ことば」について(講演録) 森有正をめぐるノート6. 森有正全集第5巻付録1-17. 筑摩書房(文芸展望秋季号からの転載)
 森 有正(1979)：「経験と思想」 森有正全集第12巻 筑摩書房
 森 有正(1982)：森有正対話篇1.2. 筑摩書房
 山本七平(1997)：「空気」の研究 文藝春秋社

ABSTRACT

Interpersonal characteristics of Japanese people seen through the linguistic style based on A. Mori's Niko-kankei.

Mikihachiro TATARA

This is a part of clinical and psychological study series of Arimasa Mori, a Japanese philosopher. In this paper, author tried to focus on his thoughts of the language structure of Japanese compared to French. He found the difference of speech in relation to whom, where and how in the context of interpersonal relationship. In contrast to French, Japanese language has to be used always in the consideration of whom you are talking to. Interpersonal relationship with the object to whom you are talking has to be always considered in the talking situation. This culturally bound way of expression is called Niko-kankei, which forces to take account social and interpersonal relation in two person relation, talker and listener. Mori tries to speak independently with a listener without considering talking situation and interpersonal relation of the talker and the listener. However, it seems to terribly difficult to speak Japanese in Japan in the way of speaking French.